
始まりの交換日記

しみちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりの交換日記

【Nコード】

N7724D

【作者名】

しみちゃん

【あらすじ】

恋愛モノですがぐだぐだで意味不明の小説です。読む際は十分注意してください。

私は八雲花火。

今の状況を落ち着いて整理してみようと思います。

ココは教室。

私の机の上にはノート。

開くとアイツの綺麗な文字。

これが交換日記の始まりでした――

「委員長!!」

「何？」

暢気に返事を返す委員長こと小沢銀。

「このノート何よ！」

「ああそれね。交換日記だけど？」

「それくらい見たら解かる!!!何で私なのか聞いてんの!!!!」

「八雲さんと交換日記するからだよ。普通に考えてよ。」

何コイツ…。さらっと言ってるあたりムカツクんですケド。殴って良いですかね？

「殴らないでよ。痛いから。」

心読まれた!!!？

「いや、声に出てるからね。ま、とりあえず僕書いたんだし次八雲さんの番ね。」

そう言って委員長は爽やかに去っていった。

「何やねんアイツううう!!!!!!」

訳の解からなさに私は叫んだ。廊下の真ん中で。

ノートを改めて開く。

アイツの綺麗な字で簡単なプロフィールと昨日あった事（つまり日記）が書かれていた。

私にどうしろってんだよ。

てか何で私なんだよ。訳わかんねえ。

私は親友の松田美亜に相談した。

「書きなさい！何があっても地球が滅んでも死んでも書きなさい！
」

いやいや、死んだら書けないだろい。

「おだまり花火！！」

あれ、デジャヴ？

「小沢って超人気あるんだよ！？私が花火だったら絶対書く！迷わず書く！！死んでも書く！！！！」

「だから死んだら書けないっての。」

「とにかく！こんなチャンス二度と無いよ！！続けてみて嫌だったら断ったら良いじゃん。」

「うん…。じゃ、とりあえず書いてみるよ。」

「頑張ってw」

「人事だと思ってえ…。」

涙目で美亜を睨む。

「だって人事だもん。頑張んなよ。」

家に帰って返事を書くとするけど正直何て書いて良いか解からない。

「プロフィールだけ書いところ。」

そして私はプロフィールを書いて寝た。

次の日委員長に日記を渡した。

「へえ、本当に書いてきてくれたんだ。意外。」

「何よそれ。文句あんの??」

「別に無いよ。書いてくれてアリガト。」

委員長が笑った。

心なしか顔が熱い…。風邪かな？

「はくなくびくちゃん!」

「うわあっ!!」

美亜がいきなり抱きついてきた。

「脅かさないでよ!!」

「ゴメンゴメン!で、小沢が笑った時何で花火は顔が赤くなったのかにゃあ?」

美亜がニヤニヤしながら聞いて来る。

「赤くなってないもん!美亜の見間違いでしょ!!」

「そういうことにしといてあ・げ・る!」

「何それ!どういう意味よお!!」

「そのままの意味だよっ。」

チャイムと共に授業が始まる。

一時限目はロングホームルーム。

今日は修学旅行について。

因みに行き先は沖縄らしい。

今年で中3かあ…。

「じゃあ今から五分やるから六人一組のグループを作れ!」

担任の言葉とともに生徒が一斉に動き始める。

「とりあえず私ら二人は決定だね!」美亜が言う。

「そうだね!」

その後美亜の友達や私の友達を誘って六人になった。

修学旅行まであと一週間。

授業も終わって放課後。

大概の生徒は部活動に励んでいる。

その中委員長が私の所へ来た。

「八雲さん。これ。」と言ってノートを差し出す。

「早っ！渡したの今日だよ！？」

「授業中書いたんだよ。」

「いや、ダメっしょそれ…。」

「気にしない。気にしない。」

家に帰ってノートを開く。

書いてあるのは昨日と同じ普通の日記。

その中ある一言が目に残った。

『何で八雲さんは委員長って呼ぶの？僕の名前は委員長じゃないよ。』

…そういえばずっと委員長って呼んでたな…。

そう思いながら日記を書いた。

最近委員長のことしか考えてないかも…。
なんでだろう？

次の日。

「小沢！日記！！」

小沢が呆然としている。

「な…名前…。」

「小沢で合ってるでしょ？名前。」

「初めて名前呼んでくれたね。」

小沢がふわりと微笑む。

そして私は確信した。

私は…小沢が好きだ…

「美亜あ：私、小沢が好き：カモ：」

「何を今更。前から知ってるよ。」

「何で！！？私言ってるじゃないよ？？」

「見てて解かるっての。何年親友やってると思うな？？」

「15年？」

「そこ普通に答える所じゃないよね。KYめ。とにかく！小沢が好きならそう言えればいいじゃん。」

「いえるわけないでしょ！」

「ふう：。あと一週間を切ってる学生の最大イベントは何！？」

「修学旅行：？」

「その通ーりーり！！そこで告っちゃえば良いのよっ！！」

「ええええええ！！？」

修学旅行当日。

飛行機の中。

「眠れなかった：。」

「小沢の事考えてたの？」

「うん。」

「あら、今日は凄い素直じゃん。」

「眠くて反応するのがメンドイ：。」

「今のうちに寝ときな。」

「うん：。アリガトお美亜。」

沖縄に着いたのは午後一時。

それから美亜と私は一日目の旅行を楽しんだ。

そしてホテルに着いた。

夜、私は屋上に居た。

ああドキドキする：。

これから小沢を呼びに行こうとドアを開けたら：

そこに小沢が居た。

「おっ小沢あ！？何で居るの！！？」

「こっちが聞きたいよ。もう消灯だよ。」

「うっそもうそんな時間？じゃ、また明日！」

「ちょっと待って。言いたい事があるんだ。」

「何？」

「笑わないで聞いてね。僕は…君が好きです…。」
え…？今なんて…？

「それだけだから。じゃ。」

「まって！私も小沢が好き！！！」

「…まじかよ…。」

何時もの様に笑う小沢。

「これからヨロシクな！花火！！」

「こちらこそ！銀！！！」

—10年後—

私の左の薬指には一つの指輪。

隣には銀。

そして私の名前は…小沢花火になった。

始まりの交換日記。

背中を押してくれた美亜。

感謝しつくせないけど…ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7724d/>

始まりの交換日記

2010年10月24日14時13分発行